

『青井新による後日談』

髪を切る話

青井新

本編はカクヨム・小説家になろう、または
小説集『死体を捨てに行く話』でお読みいただけ
ます

あの日から、彼女と一度も直接話したことはない。もちろん特に話したいことがあるわけでもないし、話さないと困ることなんて何もない。ただ、あの日自分の後悔と決着をつけたはずの彼女が、相変わらず俯きがちで息苦しそうなのが、少し気にかかるだけだ。多分。

——死体を、捨てに行きたいの。

そう告げた日の彼女の目は、本懐を遂げてもなお僕に鮮烈な色を残している。

寒空の下、防波堤に沿つて歩いていく。その向こうに広がる海は相変わらず光を飲みこんでしまったような色をしていただけれど、今日は月明かりがないせいか、一層不気味さが増して見えた。瞬く星も、いつもより心許ない気がする。……いや、なんでもないときを見る海というのは、案外こういうものなのかも知れない。現に、実物を目の前にして、記憶の中の景色は鮮やかなままだ。右ポケットのスマホが微かに振動する。こっちに連絡を寄越していく人間なんて、一人しかいない。画面を確認して、指紋認証でロックを解除する。表示された通知が示すのは、予想通り彼女からのものだつた。

『こんばんは。おすすめしてもらった『注文の多い料理店』、面白かったです。昔の人は、同じ年でこんなのが読んでたんだね』直接話すことはないものの、たびたび彼女からチャットが送ら

れてきた。特に目的もなく、他愛のない会話をするだけではあるれど、不思議と煩わしさは感じない。

『年度によって収録されている学年は違うみたいだけどね。それにしても、相変わらずよくやるね』

『危ないことはしてないから、大丈夫だよ』

『まあ、そうだろうね』

匿名回線を使つていても、監視を気にすることに越したことはない。都会出身の優等生なのに、彼女は悪いとされることに関する知識も人並み以上にあるように感じる。少なくとも、数ヶ月前まで海に行くのにびびっていた少女とはにわかに信じがたい。何も変わっていないように見えたけれど、そういう意味では既に取り返しのつかない変化をしてしまつてゐるかも知れない、と思った。あるいは、彼女がそれだけ箱庭の外を知る努力をしているのかもしれない。

『あ、そうだ。話が変わるんだけど』

日浦さんが話題を転換させる。一つの話題を引き伸ばそうとする彼女にしては珍しい。立ち止まつて一言、うん、とだけ送る。『髪を切りたいなつて、思つてるんだ』

全く予想していなかつた方角への転換に、思わず画面を凝視する。本当になんでもないようなことだけれど、そういうことを聞く機会が全くなかつたせいか、髪を切るという言葉を理解するのにずいぶん時間がかかつてしまつた。

これは、どう答えるべきなのだろう。何かを返した方がいい、ということはわかるけれど、肝心の返す言葉が全く思い浮かばない。

『お洋服のこととか、あまり人にしゃべったりしないんだけど……。なんとなく、君に言いたくなつたの』

どうやら、彼女は僕に何かを言つてほしいわけではないらしい。意味もなく汗ばんだ手をズボンで拭いて、打つては消してを繰り返していた本文欄に当たり障りのない返信を打ち込んだ。

『へえ。長さは？』

『まだちゃんと決めていないけれど、肩くらいまでは切ろうかなつて』

『結構ぱつさりいくね』

胸のあたりまで伸びていた、気がする。彼女の姿をちゃんと捉えたのなんかあの一件くらいしかないから、確信は全く持てないけれど。

『いいんじやないかな。短いのも似合うと思う』

イメージしてみたら、自然とそんな言葉が出た。

『ありがとう。古屋くんも、初めて会つたときよりだいぶ伸びたよね』

急に気になり出して、インカメに切り替えて自分の姿を見てみる。何も手入れをしていない髪が、いつの間にか肩に触れかかるくらいになつていて。あれから何も変わったことはないと思つていただけれど、意思が関係ないところでは僕も変わっているようだ。

「ありがとうございます。…………でも、やつぱり前ほどの精度はない、かな。お父さんに報告しないと」

咳くように言つた彼女はきっと父親に連絡するのだろう。簪を掃く手が止まり、彼女が眼鏡のつるに触れる。彼女曰く、「メッセージアプリを開く」ためのアクションらしい。ロボットの手を握る意味は教わっていないので分からないままだけれど。

僕は相変わらずARの恩恵を受けられずにいる。けれど、先週から試験的に導入されたあのヘルスケアロボットは、どういうわけか僕の存在をちゃんと認識していた。仕組みはともかく、理由

——えっと、うん。大丈夫、ありがとうございます。

誰もいない教室からは律儀に頭を下げる彼女の姿がよく見えた。再び貧乏くじを引いたのか、静まり返つた廊下の床を一人で掃き続けている。もう一人は誰だったか、と僕が思い出すよりも先に、ロボットが名簿から名前を見つける。

『また村上さんですか。減点ですね』

「あつ、あのつ、待つて。村上さん、今日は病欠だから、当番は無理。だから、減点対象じゃない……と思う」

彼女の声に反応して、ロボットの胸のライトが青く光つた。どうやら納得したらしい。彼女は胸を撫で下ろしてロボットの手を握る。

「ありがとうございます。…………でも、やつぱり前ほどの精度はない、かな。

お父さんに報告しないと」

は彼女がデバッグを務めている時点でなんとなく合点はいく。

大きな溜息を一つ吐いた。二人で掃除をするのはあの貧乏くじ以来だ。

「あつ、古屋くん。えっと、お久しぶり……？」

教室を出た僕に気づいたらしい彼女が、戸惑いがちに小さく手を振った。その手が合図だったのか、ロボットの顔がこちらを向く。

『古屋さん、自主的なお手伝いは加点対象です。素晴らしい行いですね』

「えつ、あ！」

ロボットの指摘でようやく目的に気づいたらしい彼女が、慌てて頭を下げる。

「ありがとう」

「別に、暇だったから」

彼女の側に放置されたちりとりを構えると、拳動を捉えたらしいロボットの胸のライトが白く点滅した。どうやら無事に加点処理とやらが行われたようだ。現時点で僕の『人格・道徳』への加点ができるのはこの一体だけなので、正直、中途半端に加点されない方が境遇に対する理解を得やすいような気がしなくはないけれど。

ごみを掃く彼女を盗み見る。さつきまで気に留めていなかつたのに、近くになると短くなつた髪が目についた。

「髪、本当に切つたんだね」

「あつ、うん」

短く切り揃えられた髪は、イメージとは少し違つたものの、彼女によく似合っていた。野暮つたさがなくなつて、心なしか明るくなつたように見える。

「切つてから何か変わつた？」

指先に髪を絡めるくせは健在なようだ。彼女は思考を辿るように、上を見上げながらぼつぼつと答える。

「シャンプーとか、乾かすのが楽になつたかな。でも、寝癖はつきやすくなつたかも。やっぱり、やってみないと分からぬことつて結構あるね」

そつか、とだけ返して、ちりとりの背で軽く床を叩く。どうやら少し加減を間違えてしまつたようで、足元で少しだけ土埃が舞つた。彼女がそれを丁寧に掃着直しながら、「勇気を出してよかつた、んだと思う」と小さくこぼした。

「勇気？」

「うん。変わりたい、と思つたんだ。でも、うまくいかなくて。形だけでも変えてみたら変われるんじゃないかつて、思つたんだ」「へえ」

変わりたい、という言葉を頭の中で反芻する。

彼女の一世一代の決意に触れて心が動いたことは嘘ではない、はずだ。そうじゃなかつたら青環法リスカフを犯してまで彼女をあんな場所まで連れて行かなかつたし、そもそも話に乗ることすらしなかつたと思う。

けれど、そもそも人がそう簡単に変われるのなら、過ちを繰り返すはずがない。それでも、彼女は変わって、前に進もうとしているのだろう。

「僕も、そろそろ切りに行こうかな」

気づいたときに抱いた感情はとても懐かしくて、少しだけ鼻の奥がつんとした。彼女の一世一代の決意に触れて心が動いたことは嘘ではないはずだ。そうじやなかつたら『青環法』『リスク』を犯してまで彼女をあんな場所まで連れて行かなかつたし、そもそも話に乗ることすらしなかつたと思う。

けれど、そもそも人がそう簡単に変われるのなら、過ちを繰り返すはずがないのだ。何も不思議なことはないはずだ。それでも、彼女は変わって、前に進もうとしているのだろう。

「僕も、そろそろ切りに行こうかな」

気づいたときに抱いた感情はとても懐かしくて、少しだけ鼻の奥がつんとした。



▲WEB拍手

青に溶ける後日談『髪を切る話』

著者 ————— 青井新

©2021 Arata Aoi

発行元 ————— 仮構出版

(Mail:kakou.publisher@gmail.com)

△オークションへの出品や転載・複製等、個人での利用範囲を超える行為は固くお断りします。
発見した際には使用料の請求等有個にて対応させていただく場合がございます。ご了承ください。

出版構